

菱肥会海外研修報告

～ アムステルダム、ウィーン、ブタベスト

菱肥会総会（10月16日）に先駆けて催された恒例の菱肥会海外研修は、6月1日のオランダ、アムステルダムから始まり、オーストリア、ウィーンを経て、ハンガリー、ブタベストを回る8日間の行程をつつがなく終えた。

九州とほぼ同じ面積をもつオランダは、日本皇室とも親交深い立憲君主国で、その国土の約半分は海面下であったが、堤防を造り水車で海水をくみ上げる想像を絶する灌漑開拓をした結果、大農業国として発展をとげた。アムステルダムの花市場は有名で、日本で栽培されるチューリップの球根はオランダに大きく依存している。オランダ



有機農業センターにて（6月2日） 藪崎社長提供

の畜産業も盛んでチーズの加工技術は世界最高峰だ。最初の訪問先の有機農業センターでは、オースト・ファン女史が有機農業の現状を「なぜ有機農法が必要か。今いるところは、今でも海面下5mで健康な土づくりが農業の生命線。堆肥づくりには畜産業との連携、窒素欠乏にはクロバー栽培によるグリーン肥料、連作障害を防ぐ輪作体系、消費者の理解を得る為の都市と農村の交流などあらゆる努力をしている。しかし、オランダの有機農業は全体の2%弱で、オーストリアの13%、フィンランドの7%に比べると遅れている」と熱っぽく説明。オランダにおけるグローバルGAP認証農産物の市場占有率は100%に近く、「有機農産物であってもGAPの認証を取得しないと大手小売店は扱ってくれない」とGAPが取引条件となっている実情の解説もあった。輪作体系で玉ねぎ、いも、ごぼうなどを60haの畑で栽培している好青年ヤンサン・イフレンさんは、「有機農法もGAPも大変だけど、去年は儲かったよ!」と明るく語った。有機農法でパプリカ3ha、トマト5haをハウス栽培



有機農業センター視察風景

している女性経営者のアナリス・ファンスキさんは、「色々工夫しているけど、トマトのピッキングは人手が一番。衛生管理と労務管理が決め手! 皆さんも白衣を着てください!」とエネルギーにハウス内を案内。汗まみれの我々に「輸出も含めた安定販売には、GAPは欠かせないわ」と儲かる農業の秘訣を語ってくれた。充実したオランダ農業視察を終え、ウィーン、ブタベストでは13世紀から19世紀初頭

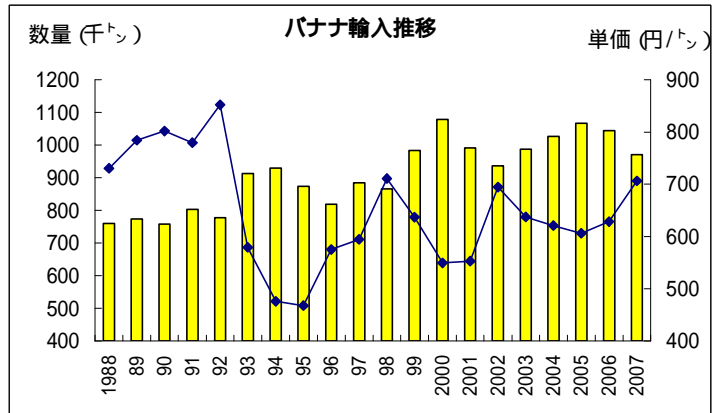
にかけ、欧州全体に政治・経済・文化で影響力を持ったハプスブルグ王朝の世界遺産を視察した。23歳で女帝となったマリアテレザは何と16人の子供に恵まれ、末娘はフランス王ルイ16世に嫁いだマリー・アントワネットだ。彼らの住まいでもあったシェンブルン宮殿ではモーツァルトに、ブタベストではその夜景が映える青く美しきドナウ

川に酔いしれながら、宮本団長（宮本商事(株)千葉県）以下26名は肥料価格の高騰をひと時忘れ至福の時を過ごした。

流通が選ばれる時代が来た

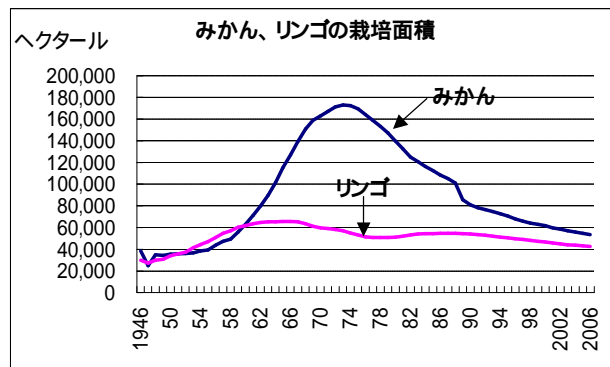
～バナナが高くなる...ある青果物流通業者の告白

栄養価の高いバナナは健康食品として価格も値ごろ感があり庶民の好物であったのが、いつの間にか安売り果物の目玉となった。ところがそのバナナの安売りが昨年あたりから姿を消した。バナナの輸入は2000年の約108万トンにピークに07年には約97万トンにまで減少した。価格も05年頃から右肩上がりとなり最安値であった95年に比べ50%弱の値上がりとなった。輸入業者によると、生活水準が豊かになった中国並びにロシアにおける需要が旺盛で、日本は市場での買い負けが続いているという。



国産みかん、リンゴは？

バナナが象徴的であるが、従来のように安く買い叩いては、輸入農産物の確保が困難になっている。国産果樹の代表格のみかん、リンゴの栽培面積の推移を見てみると、みかんは1973年の173,100haをピークに減少し2006年では1958/59年の水準まで急減している。リンゴは1965/66年の



65,600haをピークに減少しているが緩やかなカーブとなっている。ある大手青果流通業者社長は、「果樹は生産者の高齢化とともに集荷・摘果における労働力不足で生産量は確実に減少していき価格は上昇傾向になる。同様なことは野菜などでも当てはまり供給不足から価格上昇局面を迎える。更に、輸入青果物は日本のポジティブリスト制度の壁が厚く輸入リスクが高いため、流通・加工業者の国産志向が高まり3年以内に青果物インフレが起きる可能性は高い。」と今後の見通しを語る。

青果物インフレ到来に備えて流通業界の対応は？

青果物生産者は利益確保のため市場流通を避け、原価が確保できる契約栽培、ないしは物流コストをかけない地産地消を追求するようになる。必要な時に必要な価格を要求する流通に振り回される生産者は少なくなる。青果物流通業者は受発注業務のシステム化、合理化による経費削減を実践し、生産者の安定収益を図れるような契約栽培の提案が不可欠となるであろう。流通業者が生産者によって選ばれる時代が到来するとも言える。

青果物流通業界が期待する生産資材供給業者の役割

青果物流通業者にとって、生命線は集荷の安定と消費者に対する安全な食品の提供である。国産志向のなか、生産者に対し「生産の安定と品質の維持などのサービス」を提供する生産資材業者の役割が見直されている。世界的な肥料資源の高騰のなかでも、安定した肥料の提供は生産の安定・品質の維持には欠かせない。ポジティブリスト制度での残留農薬回避には適切な防除技術も欠かせない。農と食の連携時代では、青果物流通業者と生産資材業者が連携をし、農家収益を安定確保できるような仕組み作りが重要だ。

この時季になると怖いのが食中毒。近年「カンピロバクター」による食中毒が増加しているそうです。牛や鶏などの消化管に存在する菌ですが、十分な加熱調理をすれば問題ありません。肉を素手で触った後や使用した調理器具等は、他の食材に使用する前に必ず洗浄することをお忘れなく。

編集局長：小田原次洋 アシスタント：助川尚子